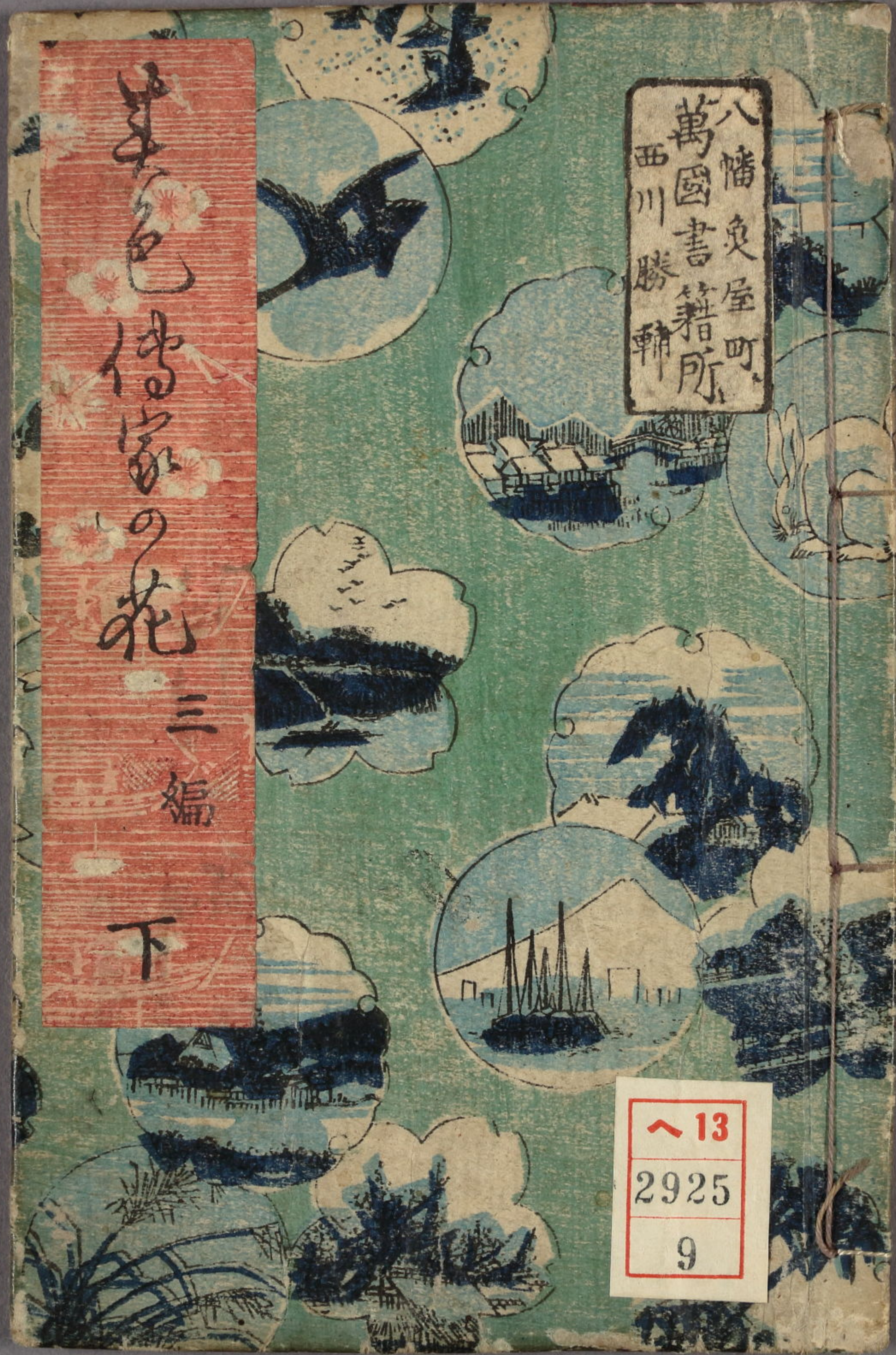




草花傳家の花
三編
下

八幡灸屋町
萬國書籍所
西川勝輔

へ13
2925
9



門 へ 13
2925
巻 9

昭和九年
二月六日
購求

春色傳家能花卷之九

江戸 爲永春水著



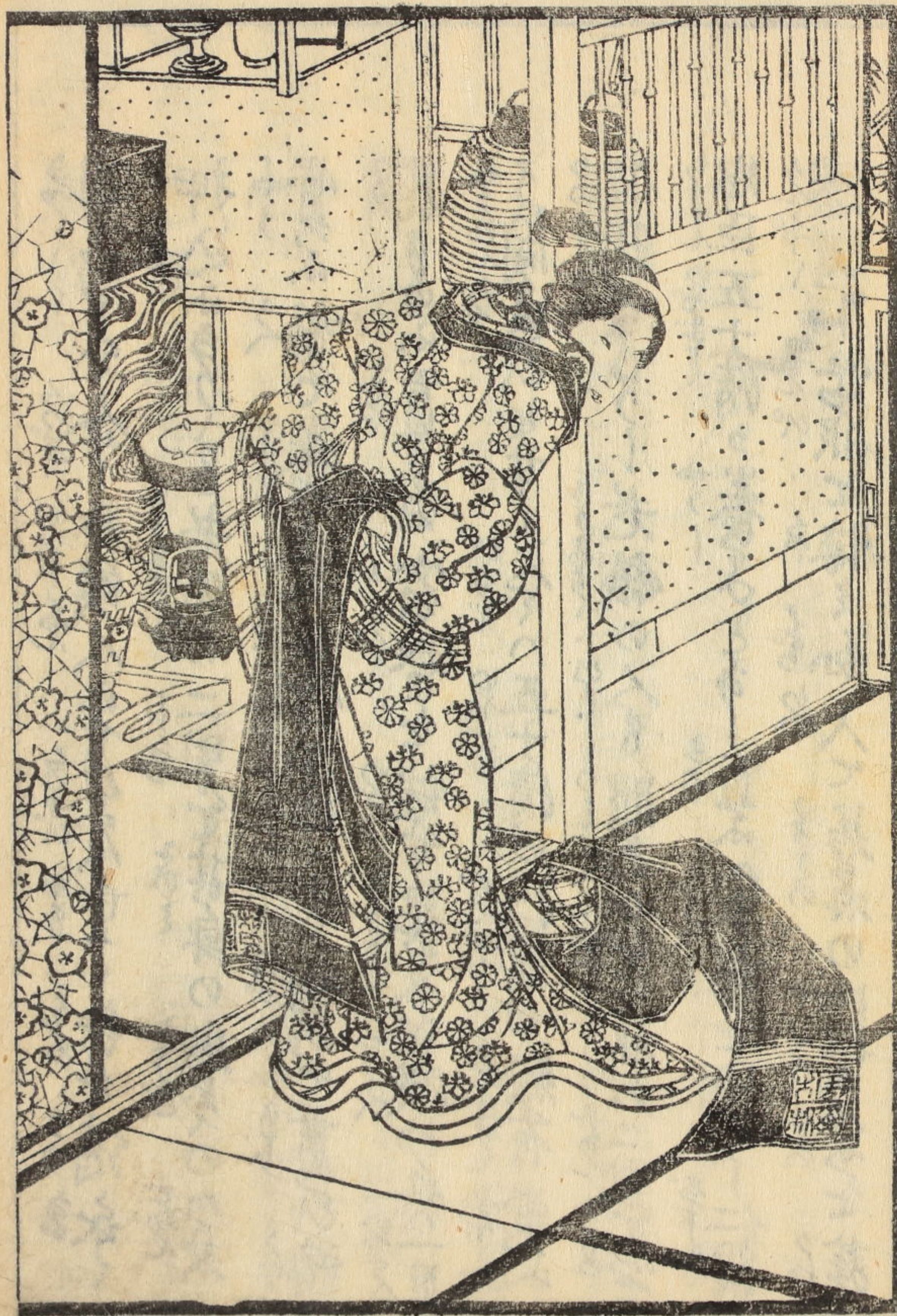
第十七回

白河院の御製より世あらず傳ふ古歌を妬ぐ他の燈と
あて江戸敷座ふみ記しう

武蔵野へ霞の関ふひら家の石の枕や野寺の石ふ
其一軒家を遠慮して幾ふ軒の釜土敷地が池ふる名を
ふくみ形を疎しう岩の建つる貸家家の観音さるも

迷ふべき娘の所の名物めて筆走も足ぬ美人の才女
一とく境内入者へ彼異國の桃源洞入て仙と称ふ
小勝るべし然る諸商人もは院中を商儲の別世を
あて賣るなりりお父昼表の差別をく因縁を懸ふ
裏家の体辰列の頃も有けん。竹門ゆ揚く。小
用へようふ大の徳利へ明ませんうぶようふと
のふを聞て黒曜の扉を明く一個の妙娜の
小僧さん味淋酒と醬油を持て来てお呉れよては

山野の使へるがきゆふ居る。昨夜の道具をぬきお呉
き外へ用があらう早くと然る言とお呉れ。小ハハく今
靈府さぬの門あは居る。うら左ねやませうと約する
お茶へ茶料を弄舞の杯へ茶も茶もてお殿の用を
初る所へ山野とゆふは出の料理屋の家よう茶の
物をもも取寄せ亦自玉を焼をてう入膳を備へる
さうふとて。お記を成もせぬ。トおを。一とく國
より直る。床の中へ起ゆ。きん。四半のよぬちち



内々巧を企て登頭人ゆては度重く咎を請ふ
押込ふりたる老職の二男と其身の忠義の由
賞ふ智を養ふふは作分極めと預ひて賞ひ清
其のふ直きぬ家督を継ぎ忠孝を教ければ一旦
了同遠ひとせし人々五十清の仁義を解有覚へ
彼頭人より老職の人を罪ある其身の二男を
忠臣五十清が養ふとて直き家督をゆづり仁義
感服し恭順と悔み私入て若君の内親を蔭

みづりも千代万代と祈るゝをぞ

あふアノ母の不人情なりとてお安を成てなすチお糸
さんかお國へお出な成あふ五十清の方へお出なすこと
あふお金を私あふは三も圓せりひではお糸さんいふ首
尾でお國へお出なすを押しとておはるを成のさふ二度と
再度け地へお出な成りいふお糸さんいふとて圓せりお糸の病
中ふ小兒もも眼おはしやと味川町の冠四郎といふ
者の親元おふとてお糸さんいふはさうこのためなりぬのを

ト涙を後せば 一丈く丈も家早るるのうら悔ま
るの宜 胎家のゆいふ面を町より人形屋の方を
胎日圓の三蝶さんといふ委しく圖を貰ふが才一
是非其三蝶さんが来る成るべ頼ひが様も親智
の料理 茶室の方みねて居る娘のお玉といふのが一
ひ方の実ふで在るひうき出入の町人めども頼んで空
糸と貰ふう然思ふが宜 今度十七年経て参りて
あても其方が 移身で相違ふと云ふ見ぬおて居る娘

あまのり 下と赤糸ら一のがままと娘へ成長しうらね
あう 笑合を度めのものを思ひてか山へ糸箱とてく
経てゑふ山を思ひて見ると梅の井といふ樹方他家各
へ用ひるふのうらよや其方どののまゐとあひ
る家号をうらうとさみ立寄つて見ると其方
うら。イヤ 寔に怖うし 長い年月お案だ
やて居るうらうと喜ひ 涙をさうくと落し 赤子の
るがゑふうらと云ふうらひまもるの所で何うのゆを

さきうーと胸がドキととておせうとくちで直め
尋ねてゐて名を合て見交りのぶがけねと
ゑをいんで居るこの所へお茶さんがかかて成てお茶を
見まうと時へ電みまへんいとも何も今更けね
斯うてぶるまうとといふひもいふまゝのねでぶるま
ヨトひ時外の方を商人の愛 煮豆まうと
煮豆まうとまうとまうとマア煮豆が来るを已に知らる
のりまをぬヨト膳をぬーあーとては空腹ぶるまうと

さきうーと胸がドキととておせうとくちで直め
尋ねてゐて名を合て見交りのぶがけねと
ゑをいんで居るこの所へお茶さんがかかて成てお茶を
見まうと時へ電みまへんいとも何も今更けね
斯うてぶるまうとといふひもいふまゝのねでぶるま
ヨトひ時外の方を商人の愛 煮豆まうと
煮豆まうとまうとまうとマア煮豆が来るを已に知らる
のりまをぬヨト膳をぬーあーとては空腹ぶるまうと

だえ ちやのこころ ちやのこころ
後を遂て儲より 孫補樓ふりう王者の奉公の暇を
取り合ふ乃びう

是迄三冊の物語の初編二編の以ては二編の
り多くありて十章より昔の場とまゝ二編の
まゝに續く所とのまゝに混雜して後編の思ひ
なるらん例の各篇のまゝより一編の
極小預ふこと
今それ物語の一件よりまゝに初編の巻中のけく

と二編の流るる一條といつても放まぬ
必しも最ふやうに依之王者の身の流る
お栗のりも亦四編の流るるものなり
よませうと

第十八回

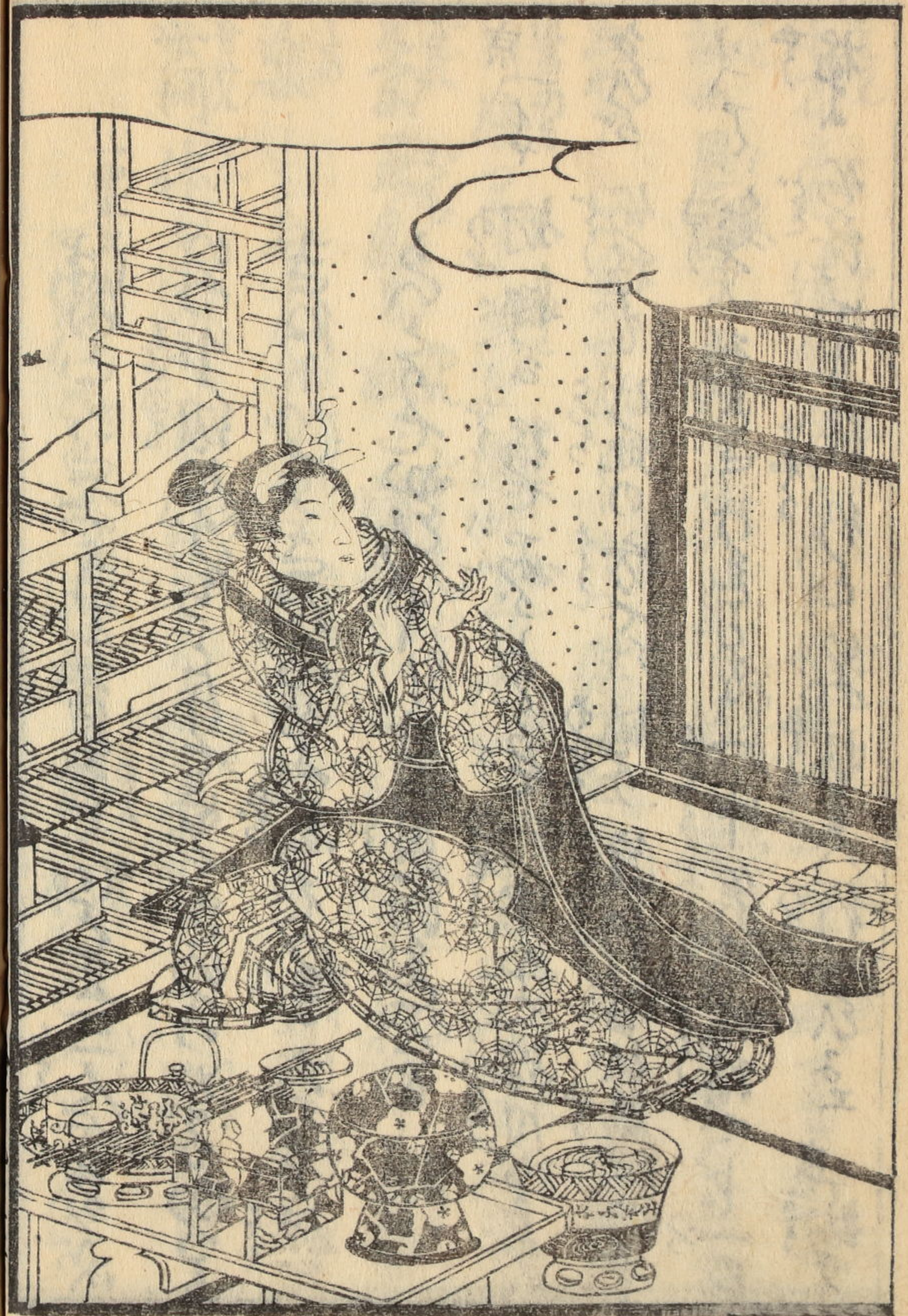
鷺界青山一株秋 湖平銀浪接天流 柳橋入
蘆花去 家在夕陽江上頭 かつらわさみも見のり
るまゝの一軒の料理をわう遠く客より東の方を覗き

見まはす雲あつて海の家沖の白帆の百千船名も高
名輪の海の面を渡るも色もう諸の二階の板
うけまふ候と見の浮り一藝者の小万を空の天羅
とつてまゐる月花の壁をくぐり揚貴妃小町姫のま
ぐく一七此妓ふも及玉露花が當世風ふ化ふべはね
がふくと思ふも美人のて見別二編目の才九田新
田の富源は米の石の運とりの人の宅のそお光との
女が京三郎といふ情人の情を言ひ聞女も京三郎が

流く契約しるゝ人あつた相人の彼京三郎とおふゝ
小万の候を越て居る所へ下り酒肴を運ひ来るへ
おけ酒でござるわすゝこゝろ官宅の今月の出がまふ
下が込合まゝゝゝ大まふ遅くもまゝゝ小万ナア二
分程遅くも門でも能くも滅多にお出でないう
今日ハ十か久々ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
本三余りでござるまふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
お目ふるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

それより利きヨモ四十日なりふる人晴るしに何と
遠入りひそお存ぞうおまやアあまひの京へ三そん
極久く来む居るものやアホニ近頃途中で
お同ふをうまうけりよアアヤア何軒で上ト因縁を
ききとて
笑ふお家ある情女でも出来ぬわぬうとふむ
アア一五なるゝあふおをけな成所でお同ふうこのど
とてかきせん新田さぬのまをいふまふあうの第田
舎ででお同ふうとてまうこよ上具那然でござるまうこよ

トいふ京三第ハ物り一服とパチくし七小ふおおまひ極お
は苗をさる是は故うまぶお光と其身がけ本の屋の庭の
本戸隙の外畑の側でト女を外を相ひみ隠まん
むとあそ居る様ひの所と此の桑屋の女が通うるそと
者局一の女を言とて大愛ありと同文をト
止りしやアアア矢口の方へ何ふ何でお存ぞよエ
おのち上総の方へ何て来たとお言ひばアアハウト
かーむづうーくうとてふふおまふ女ハ笑ひまづアア



ど一の田舎でもなるる妙ど 小一ヤ田舎でも流る
頃さんぞを頃河で居んで居る所へ行くお在の人
ト京三郎の顔をおまじ見流る 京一サ今度ハ
おねえさん流る後へおまじのやアおまじ只田舎でも
今どやアおまじなるるでいふ鎌倉の者なるの
利と人が幾人も居て信切の世話をしと居るる
頼めしといふりや 小一アおまじ 主田舎の人達を
使客も人の世話も能くするまじ久しに流る

田舎のおまじへお頼りなすいふがわいする主跡の
おまじがおまじの世話をしと居る
ううううとあるのがおまじとありまじ 京一
土地へ情人でもおまじとありまじ 小一ヤおまじ
おまじさんどやあるまじ 京一アサ直の腹を
困る 小一おまじの腹を
弟は身が流るるまじ 小一ありまじのや
當時でもおまじを求めてお在まじのラ 京一日本

かゝるまゝに^{それ}び^{どう}けて居^かるうゝ三^{どう}ふむど^{どう}い^{どう}か^{どう}ひ^{どう}て^{どう}が
お^{どう}も^{どう}の^{どう}も^{どう}同^{どう}じ^{どう}の^{どう}う^{どう}なる^{どう}居^{どう}る^{どう}所^{どう}を^{どう}新^{どう}田^{どう}の^{どう}は^{どう}の^{どう}
や^{どう}の^{どう}居^{どう}る^{どう}ん^{どう}の^{どう}借^{どう}帳^{どう}と^{どう}思^{どう}ひ^{どう}す^{どう}ん^{どう}ト^{どう}言^{どう}を^{どう}聞^{どう}て^{どう}
京^{どう}三^{どう}希^{どう}の^{どう}物^{どう}り^{どう}ー^{どう}京^{どう}一^{どう}の^{どう}所^{どう}帳^{どう}と^{どう}は^{どう}米^{どう}の^{どう}屋^{どう}を^{どう}お^{どう}ひ^{どう}て^{どう}
居^かる^かの^かト^か好^か時^か保^か目^かを^か居^かる^かう^かける^か

あゝあゝ^{あゝ}ん^{あゝ}の^{あゝ}ま^{あゝ}
春色傳家能花卷之九了

